

和本の世界① 和本で見る日本人の書物観

古活字版と近世初期の出版

7/1

誠心堂書店・橋口 侯之介

近世の始まり

中世と近世の境界をどこに置くかは意見の分かれるところ。そのいずれであれ書物の歴史からみたときは、年号で文禄・慶長(1592-1615)頃を近世の始まりと考えるのがもっとも整合性をもつ。このときに日本の書物の世界を一変させる大きな出来事があったからだ。

古活字版

このとき注目されることは活字印刷の技術が朝鮮から入ってきたことだ。この印刷方法の導入こそが、わが国の書物史に大きな変革をもたらす契機となった。それはたんに技術的な進歩をとげたことにあるのではなく、それに伴う書物観の変化があったことに意義があったのである。

朝鮮では14世紀には銅活字による印刷が行われ、仏教や儒学などの文献が刊行されていた。

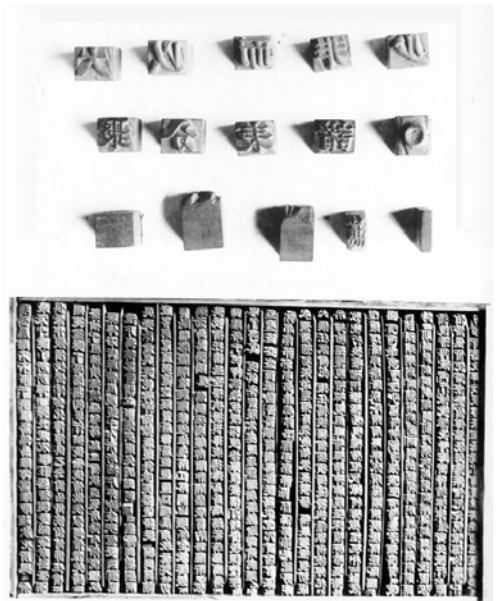
その源は唐代で陶器をつかった活字印刷が試みられたとことが文献から想定されている。やがて鋳型に一字ずつ文字を彫り、青銅を流す鋳造活字も宋代には考え出されていた。しかし、実物が残存していない。

それが高麗に伝わり、もともと金属を象嵌する技術にたけていたことも相まって実用化が進んだ。次の李朝もこれをよく受け継ぎ、美しい仕上がりの銅活字印刷が行なわれるようになっていた。グーテンベルクが鋳造活字を用いた印刷法をみだしたのが15世紀半ばだから、それよりずっと早くに活字印刷技術は中国・朝鮮で実用化されていたのだ。

はじめ朝廷や豊臣秀頼、徳川家康などの公式な出版でつくられたが、しだいに民間寺院に移る。とくに日蓮宗、浄土宗、浄土真宗などの寺院に印刷技術が移っていった。

近代以降の活版印刷や、江戸時代の後期に流行った木活字版印刷と区別するために、これを古活字版という。一字ずつ印字するので当時は「一字版」とも呼ばれた。それに対して、従来のページ大で木版を彫る方式を「整版」といって区別した。

→古活字版『孔子家語(こうしけご)』。品位のある大型の本だが、よく見ると、文字の不揃いがあるし、周囲の罫線もピタッとしてない。本文の文字以外は後の人の書き入れである。



東大寺に保存されている木活字



キリシタン版

16世紀末からキリスト教を伝えたイエズス会が布教のためにおこなった出版活動をキリシタン版というが、その印刷方法も活字を用いた。

ヨーロッパから将来した印刷機で、キリスト教の入門書や辞書をつくったほか、イソップ物語や平家物語などの文学書も刊行した。しかし、秀吉の伴天連追放令など禁教への動きが強くなったことなどから全国に普及することがなかった。

宣教師たちが出版に意義を認めたのは、日本人が文字によって思考する基盤が強かったことを見抜いたからである。このことは、日本人の書物観を探る上で念頭においてよいことである。

→キリシタン版『太平記』の目次部分。行書体の文字を用いている(天理図書館蔵)



古活字版の意義

印刷はすぐに寺院だけでなく、武家や一部の上流商人の手に移っていく。そのため、仏教以外の分野の書物がさまざま刊行されるようになった。

とくに漢籍や医書に加え、**仮名入の物語**や国史の書物まで刊行されるようになったことに大きな意義があった。『源氏物語』『徒然草』『平家物語』『太平記』などが印刷されたのは活字版が最初である。しかも人気だった。読者層も学僧から公家や上流の武家に広がった。中世のお伽草子もいくつかはこのとき初めて印刷された。



嵯峨本『伊勢物語』から。絵は木版で印刷、文字はこれで活字である

嵯峨本

京都・嵯峨に住んだ角倉素庵(すみのくらそあん)がスポン

サーになり本阿弥光悦(ほんあみこうえつ)が文字をデザインした活字本を嵯峨本という。その代表である『伊勢物語』は、活字の美しさに加えて木版の挿絵を入れ、いくつもの色が入った紙(色変り料紙という)にこるなど記念碑的な本となった。慶長13年(1608)に出版された。

最近の研究ではこの年だけで最低三回(四回と数える人もいる)増版した。それほどさばけたのである(売品としたかどうかは確認できていない)。

平仮名の活字印刷

漢字は一文字一文字独立しているので、一行に入る文字数が固定できる。『孔子家語』は9行×18字詰めである。10行×20字の400字詰め原稿用紙はここからきている。しかし、平仮名はそうはいかない。もともと漢字のくずし字(草書体)から形成された表音文字なので、原則として平仮名交じり文は、漢字も草書体を原則とする。上図嵯峨本『伊勢物語』の右側のようになる。草書体は文字と文字の間もつなげる。これを連綿といい、それを活字で表現することは至難の技だった。

つまり、文字1字に一つの活字でなく、仮名でもいくつもの種類の文字種を用意しておかなければならない。それも美しく仕上げるために。

古活字版の見分け方

活字かどうかは、慣れてこないと判断しにくい。そのコツがわかれば見分けられるようになる。

活字の大きさが微妙に不揃いであったり、組んだ文字の方向が曲がったりしてしまうため、刷り面にどうしても文字の濃淡やゆがみなどが出てしまう。

匡郭などの罫線も古活字版では板を差しこんで組むのだが、どうしてもピタリとはまらない。そのため枠の角のところに隙間ができてしまう。そこをみきわめる。

活字はなぜ廃れてしまったのか

嵯峨本『伊勢物語』は人気があったので、異植字版いしよくじばんといってそのたびに活字を組みなおして再版した。このあと慶長 14、15 年にも異植字版を出した後、活字をやめて木版印刷（整版）で出版を続けた。再び中世以来の印刷法である一枚の板に彫る木版印刷＝整版で対応することになった。そうすれば増刷がいくらでもできたからだった。

江戸時代では寛永を過ぎると、いったん活字印刷の火は消えてこの整版が中心である。

たしかに活字は進んだ印刷術だった。しかし、それ以上進歩をとげなかったのは、いったん組に使った活字は、印刷後ばらして次の本のために再利用する方法だったので、再版するには効率がよくなかったからである。漢字が多いので、数千字分の文字を用意しておかなければならないし、仮名なら連綿活字をいくつも用意しておかなければならない。そこがアルファベット 26 文字分で足りたヨーロッパと違う点である。

こうした生産性の低さのほか、細かい文字が使えない不便さもあった。たとえば漢籍の訓点を活字で入れることも困難だった。

本屋の登場＝商業出版の始まり

古活字版が盛んに作られるようになったときも、従来の木版技術は残っていた。

その職人をかかえて本づくりのノウハウを維持してきたのは、それまで本を作ってきた寺院だった。そこで版木を彫る、刷る、製本するなどの各種の職人をかかえていた。

一方、町衆が台頭し、そこから商業出版をする者があらわれ、寺院の職人をつかって本を出すようになった。書物に携わる商人や職人は、京都でも寺町周辺の町衆らである。

寛永の十年頃を境に古活字版は激減し、かわって町版の整版本が急増する。

古活字版で培われたさまざまな分野への出版の進出は、大きな広がりを見せ、さらに新しい読者層を獲得していった。

その第一は、もっとも数が多かった仏教関係書や儒学を中心とした漢籍は、漢文だが、それに訓点や振り仮名を入れて印刷したことだ。

第二が、平仮名交じりの古典文学と並んで、当代の作家が当代の読者のために、当代のことをテーマとした作品が登場したことである。いわば書き下ろし作品。これを仮名草子といい、中世までのお伽草子が「昔々」の架空のことをテーマにしたことと異なる。これも商業的な採算がとれるようになったからである。



仮名草子の登場

仮名草子の中には、古い物語や怪奇談、笑話をもじったものや、イソップを翻訳した『伊曾保物語』のような翻訳、中国小説の翻案もあり実に多彩である。とくにパロディが出てくるのが大きな特徴である。お伽草子にも元の作品からモチーフを借りてくることはよくあるが、『伊勢物語』をもじった仮名草子の『仁勢物語』などは原文を逐条もじった明快なパロディ作品である。近世の俗文学に通底する滑稽さはここからで



初期の作品である『恨之介』はヒット作だった。次に出た『竹齋』は、今も腕の悪い医者「ヤブ」というが、その起源となった話である。竹齋は、従者・^{にらみ}睨の介と諸国行脚に出る。名所をめぐり、名古屋で開業、そこで数々のあやしげな診療ぶりが繰り広げられる。この従者が恨之介をもじっている。

このあと仮名草子には『竹齋療治之評判』、『竹齋はなし』、浮世草子に『竹齋狂歌物語』、黄表紙になっても『竹齋老 宝 山吹色』などと今度は藪医者・竹齋ものが江戸時代を通じてパロディの対象になる。

パロディが成立するのは、読者の側が元の話をよく知っていなければならない。それがわかってこそおもしろいのである。仮名草子の時代は、それがわかるレベルの読者が、商業出版にたえるほどの数に達し出したということも示している。

さらに徹底したのが西鶴。それを浮世草子という。17世紀末からのことである。

参考文献

川瀬一馬『増補古活字版之研究』（昭和42年、ABA J刊）

『江戸時代初期出版年表』（平成23年、勉誠出版）

橋口侯之介『和本への招待—日本人と書物の歴史』（平成23年、角川選書）